

すぎなみ 読書地図

Booklovers Map Of Suginami

大正時代から多くの文士たちが集った杉並の街

小説家、詩人、漫画家による杉並を舞台にした物語の数々

杉並の文化人・文士たち

杉並は、数多くの文化人が暮らし、作品を生み出し続けている地である。1923(大正12)年の関東大震災以降、暮らしやすさと新しさにひかれて多くの芸術家や小説家が杉並に移り住んだことが発端の一つとされている。すでに実績を持つ文豪(与謝野晶子、北原白秋、小川未明など)もいたが、ほとんどは文学・芸術に人生をかけることを選択し、創作の出発点として、この地にやって来た若者たちだった

小川未明 童話作家(1882年-1961年)



代表作『赤い蝋燭と人魚』は1921年に執筆し、さまざまな作家の挿絵で発行されている。中でもいわさきちひろの絶筆となった絵本は名高い。48才の時に家族とともに東高円寺に移り住み晩年を過ごした。

(写真提供:小川未明文学館)

井伏鱒二 小説家(1898年-1993年)



阿佐ヶ谷文士たちの代表的存在。1938年に『ジョン万次郎漂流記』で第6回直木賞を受賞。代表作に『黒い雨』がある。1927年より荻窪に暮らし、近隣の文化人と親交を深めながら執筆に励んだ。

(写真提供:ふくやま文学館)

中原中也 詩人(1907年-1937年)



孤独、望郷、恋、祈り…、誰もが持つ思いを深く掘り下げ、個性的な作品を生み出した天折の詩人。独身時代は高円寺や下高井戸などを転々としながら創作に励んだ。代表作は『山羊の歌』など。

(写真提供:中原中也記念館)

林芙美子 小説家(1903年-1951年)



文学を志すも苦しい生活の中1927年から妙法寺境内の浅加園の貸家に約3年暮らす。この頃に執筆した自伝的作品『放浪記』が大ヒットし、一躍売れっ子作家になった。代表作に『浮雲』などがある。

(写真提供:新宿歴史博物館)

太宰治 小説家(1909年-1948年)



大学時代から井伏鱒二に師事し、天沼に暮らした頃は阿佐ヶ谷会にも頻繁に出席した。『斜陽』がベストセラーになった翌年に玉川上水で入水自殺。没後も作品は評価され、現在も多くの読者に読み継がれている。

(写真提供:斜陽館)

石井桃子 児童文学者(1907年-2008年)



『ノンちゃん雲に乗る』の著者、また『くまのプーさん』など翻訳者としても知られる。自宅の一部を開放した「かつら文庫」からは当時の様子が伝わる。同じ荻窪に住んでいた井伏鱒二との交流も深い。

(写真提供:(公財)東京子ども図書館)

岸田國士 劇作家(1890年-1954年)



劇作家、翻訳家、小説家として活躍するとともに、1937年に劇団「文学座」を結成。自作戯曲の上演や演出を行い、日本の演劇の発展に尽力した。1928年から1944年まで杉並に暮らした。

(出典:『岸田國士全集第8巻』)

上林暁 小説家(1902年-1980年)



天沼に居を構え、荻窪・阿佐谷かいわいの作家達と親交を深めた。病妻を看護する一方、自身の栄養失調や病にも耐えながら創作を続け、幻想的な私小説『白い屋形船』で第16回読売文学賞受賞。

(写真提供:大方あかつき館)



すぎなみ学倶楽部の「ゆかりの人々」コーナー／杉並の文士たちでは、100人を超える文化人や文士の一覧(五十音順、生没年、活動分野等)を掲載しています。左のコードを読み取ってアクセスください。

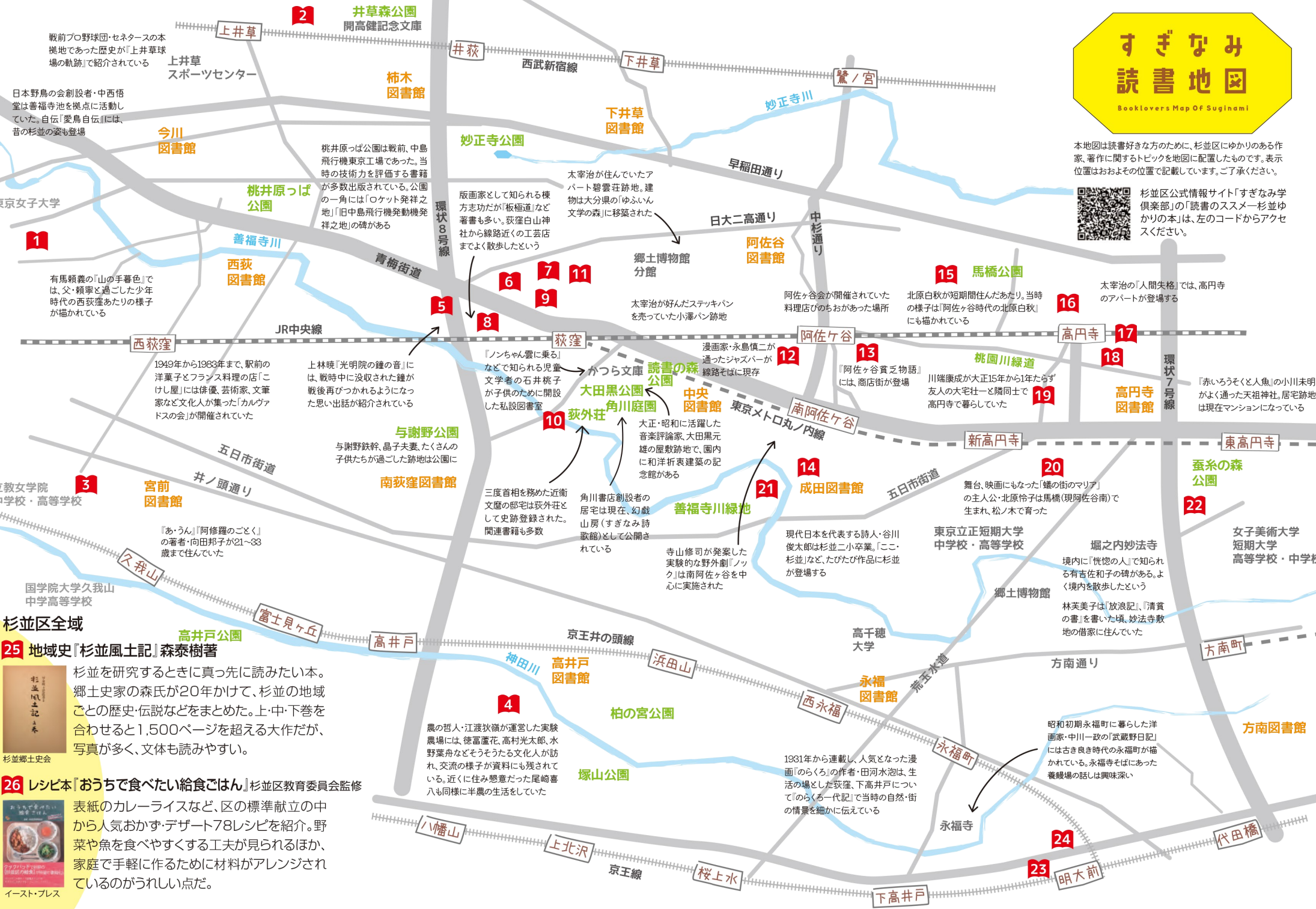
すぎなみ 読書地図

Booklovers Map Of Suginami

本地図は読書好きな方のために、杉並区にゆかりのある作家、著作に関するトピックを地図に配置したものです。表示位置はおおよその位置で記載しています。ご了承ください。



杉並区公式情報サイト「すぎなみ学倶楽部」の「読書のスズメ-杉並ゆかりの本」は、左のコードからアクセスください。



杉並区全域

25 地域史『杉並風土記』森泰樹著
杉並を研究するときに真っ先に読みたい本。郷土史家の森氏が20年かけて、杉並の地域ごとの歴史・伝説などをまとめた。上・中・下巻を合わせると1,500ページを超える大作だが、写真が多く、文体も読みやすい。

26 レシピ本『おうちで食べたい給食ごはん』杉並区教育委員会監修
表紙のカレーライスなど、区の標準献立の中から人気おかず・デザート78レシピを紹介。野菜や魚を食べやすくする工夫が見られるほか、家庭で手軽に作るために材料がアレンジされているのがうれしい点だ。



杉並郷土史会
イースト・プレス

1 小説『かがやき荘西荻探偵局』東川篤哉著

シェアハウスに住むアラサー女子三人組が活躍するミステリー短編集。かがやき荘の所在地は、西荻窪駅の北側、女子大の近くにあるという設定。3人の言動がコミカルなので、気軽に読み進められる。

新潮文庫

3 エッセイ『耕せど耕せど〜久我山農場物語』伊藤礼著

当時80歳近い著者が、久我山の自宅の農場で奮闘した日々や、実った作物などをユーモラスに紹介。杉並で家庭菜園を作る際の参考になるだろう。父・伊藤整氏との終戦直後の思い出も語られている。

東海教育研究所

5 小説『荻窪あうとろ〜』はらただお著

荻窪生まれ、荻窪育ちの著者による戦争前後の四面道かいわいを舞台にした少年冒険物語。前書きには「大人の童話」と記されている。当時の写真や地図、物価などからかつての杉並の暮らしがうかがえる。

三想社

7 教育冊子『ことだま百選』杉並区立天沼中学校編

中学校の先生が生徒の暗唱用に、名文・名句を100タイトル厳選して編集。井伏鱒二の『山椒魚』、太宰治の『走れメロス』など、杉並ゆかりの作家の作品も含まれている。古文・漢文・欧文は現代語訳付き。

講談社

9 エッセイ『役にたたない日々』佐野洋子著

晩年を荻窪で暮らした、絵本『100万回生きたねこ』の著者のエッセイ。2003年秋から2008年冬までの日常生活が、家から67歩のところにある病院や荻窪教会通り商店街などとともにつづられている。

朝日新聞出版

11 小説『斜陽』太宰治著

戦後まもなく発表された中編小説。現在でも読み継がれるベストセラーで代表作の一つ。上流階級の人々が没落していく様子が描かれているが、阿佐ヶ谷駅北口に現存する金物屋が登場する場面もある。

新潮文庫

2 エッセイ『白いページ』開高健著

1974年に茅ヶ崎へ移るまでの19年間で井草で暮らした開高健さんは、コピーライターでもあり作家でもある。酒、食、釣りなど多彩な分野での活動が有名だが、本書では杉並での日々をつづった作品も収録。

光社文庫

善福公園

4 レシピ本『関村ミキの料理帳』関村ミキのレシピを再現するプロジェクトチーム著

昭和初期まで自らの哲学を実践する農場を高井戸で営んだ農の哲人・江渡次嶺(えどてきれい)の妻ミキが、明治時代に書き残したレシピから、キャベツドレッシング、タピオカのお菓子などメニューを忠実に再現。

ライター編集委員会

6 小説『荻窪風土記』井伏鱒二著

1927年に荻窪に移り住んだ著者が、文筆生活をつづった自伝的作品。変わりゆく町の様子、作家仲間や市井の人々との交流が描かれ、昭和初期の荻窪かいわいの空気を読者に伝えてくれる。

新潮文庫

8 小説『荻窪ルースタ―物語』佐藤ヒロオ著

荻窪にライブハウスを立ち上げたマスターの自伝と開店してからの紆余曲折が赤裸々につづられている。独創性と地道なサービスの積み重ねがミュージシャンや客の心を捉え、やがて全国に知られる存在へ。

ポット出版

10 記録『近衛文麿内閣関係者が語る 諸家追憶談』杉並区教育委員会編

戦後まもなく近衛文麿に近い人物に行った取材による証言を元に、近衛を追憶した資料を翻刻した書籍。「荻外荘」で交わされた会話もあり、当時の政治・外交の動向やその時々々の近衛の姿が読み取れる。

杉並区教育委員会

12 マンガ『ひらやすみ』真造圭伍著

主人公・ヒロトの明るいキャラクターが光るほのぼのマンガ。ヒロトのアルバイト先の釣り堀は阿佐谷の寿々木園がモデル。釣り堀の様子、周囲の建物まで忠実に表現されている。「まんが大賞2022」入賞作。

小学館

13 マンガ『黄色い涙』永島慎二著

阿佐谷在住であったマンガ家による、60年代の阿佐谷のポロアパートで夢を追いかけながら共同生活を送る5人の若者を描いた作品。2007年には「嵐」主演で映画化もされた。

マガジンハウス

15 記録集『トロロの住む家 増補改訂版』宮崎駿著

宮崎監督が『となりのトロロ』に登場するトロロが喜んで住みそうな懐かしい家を、美しいスケッチ画と共に紹介する記録集。阿佐谷の1軒は、宮崎監督のアイデアを基に公園「Aさんの庭」に生まれ変わった。

岩波書店

17 エッセイ『ぼくの昔の東京生活』赤瀬川原平著

路上観察など、遊び心あふれる表現活動を続けた赤瀬川氏。大学進学で上京し、中央線沿線で暮らした日々を、本書で振り返っている。高円寺の東光ストア、荻窪のスター座など、杉並の懐かしい話題も満載。

筑摩書房

19 小説『縫製人間ヌイグルマー』大槻ケンヂ著

戦士の魂を宿す熊のぬいぐるみ「ブースケ」が、高円寺、中野を舞台に巨大組織と戦う、奇想天外なヒーローアクション。高円寺パル商店街などおなじみの場所が登場し、著者の高円寺愛が、さく裂する作品。

角川文庫

21 小説『あの家に暮らす四人の女』三浦しをん著

善福寺川緑地近くの古い洋館に暮らす4人の女性の日常が、ユーモアあふれる語り口でつづられた作品。緑地での花見や、杉並第十小学校温水プールでの夏休みなどが、生活の一コマとして描かれている。

中央公論新社

23 小説『馬を売る女』松本清張著

杉並区との関わりが深い国民的作家によるミステリー。首都高速4号新宿線の永福・高井戸間の非常駐車帯での不審な車の目撃情報が事件解決の鍵を握る作品。他に区内で起きた事件を扱った作品もある。

文春文庫

14 マンガ『ぼくらのよあけ』今井哲也著

2022年映画化された近未来SF漫画。主人公が遭遇した未知なる存在との心温まる物語。舞台はかつて杉並第二小学校そばにあった阿佐ヶ谷住宅。象徴的だった給水塔も登場。

講談社

16 小説『高円寺純情商店街』ねじめ正一著

昭和30年代が舞台の自伝的小説。高円寺北口商店街にある靴物屋の息子・正一を目を通し、家族や商店街の人々の生活と思いが細やかに表現されている。第101回直木賞受賞作品。続編2冊と合わせて読みたい。

新潮社

18 小説『1Q84』村上春樹著

現実とは異なる1Q84年の東京を舞台にした、多様なテーマの混在が魅力の3部作。主人公の男性は高円寺住まい。中央公園を思わせる児童公園など、高円寺駅周辺が物語の背景として登場する。

新潮社

20 小説『恍惚の人』有吉佐和子著

著者が当時住んでいた杉並を舞台に、認知症の舅と格闘する女性の姿を描き映画・ドラマ化もされた。梅里や松ノ木など、なじみのある地名が登場し、高齢化問題が身近に感じられる。

新潮文庫

22 評伝『インド独立の志士「朝子」』笠井亮平著

インド独立運動家アシャ(日本名:朝子)の人生を描いた作品。アシャが影響を受けたスパー・チャンドラ・ボースの墓が蓮光寺にあり今でも多くのインド人が墓参する姿が見られる。

白水社

24 小説『明け方の若者たち』カッセマサヒコ著

2010年代の明大前、下北沢、高円寺を舞台に主人公が大学生から社会人となり、現実打ちのめされていく日々が描かれる。高円寺の大衆酒場「大将」や区立玉川上水公園が登場する。2021年映画化。

幻冬舎

INTERVIEW

杉並の人気作家インタビュー

インタビューは 杉並区公式情報サイト・すぎなみ学倶楽部の「ゆかりの人々」コーナー「著名人に聞く 私と杉並」でご覧ください。



角田光代 小説家



1990(平成2)年のデビュー以来、ベストセラーを生み出し続ける直木賞作家。『八日目の蝉』はドラマ、映画化で話題になった。エッセイも人気。西荻窪の居住歴が長く『ドラママチ』には区内の喫茶店も登場する。

金田一秀穂 言語学者



杏林大学外国語学部で教授を務めながら、執筆、テレビ出演と多方面で活躍。祖父の代から杉並に暮らす。西荻窪や阿佐谷の個人商店がお気に入り。2022年には「すぎなみ地域大学」の3代目学長に就任。

谷川俊太郎 詩人



日本を代表する詩人の一人。アニメ『鉄腕アトム』の主題歌の歌詞や、スヌーピーが登場する漫画『PEANUTS』の翻訳など、活動は多岐にわたる。幼少時から米寿を越えた今も暮らす杉並を「ねじろ」と語る。

ねじめ正一 作家・詩人



初の小説『高円寺純情商店街』で第101回直木賞受賞。絵本、童話など幅広い分野で活動し、受賞歴多数。実家は高円寺北口銀座商店街にあった乾物屋。2019年まで阿佐谷「ねじめ民芸店」の店主を務めた。

平松洋子 作家・エッセイスト



大学進学のために上京してから40数年間ほとんどを西荻窪で過ごす。週刊文春の連載コラム「この味」をはじめ、食文化に関する著作が豊富。『父のピスコ』で第73回読売文学賞(随筆・紀行賞)を受賞。

久住昌之 漫画家・ミュージシャン



原作を担当した『孤独のグルメ』が漫画やドラマで大ヒット。実弟・久住卓也氏とコンビで発表した漫画『中学生日記』で第45回文藝春秋漫画賞受賞。三鷹出身で、高円寺など中央線沿線になじみが深い。

杉並区公式情報サイト すぎなみ学倶楽部

杉並のことをもっと知りたい、調べたい、と思ったら。区民が自ら取材、執筆している杉並区の公式ウェブサイトです。杉並区の地域調べに、お役立てください。

歴史



「中島飛行機 軌跡と痕跡」「杉並で始まった水爆禁止署名運動」「時代別杉並の地図」など地域に関わる証言集・資料を掲載。惜しまれつつ消えてしまった杉並名物の復刻活動など、身近な歴史記事も多数。

写真:都電杉並線の思い出

ゆかりの人々



阿佐ヶ谷姉妹をはじめ第一線で活躍するタレントや作家、区制施行90周年でスポットライトを浴びた偉人・内田秀五郎、専門分野でめざましい活躍をする人々などを紹介。杉並ゆかりの文士もこのコーナーに掲載。

写真:蟻の街のマリア・北原怜子さん

スポーツ



杉並発祥のスポーツや最近人気のボルダリングなど幅広く区内でのスポーツの楽しみ方を紹介。ラジオ体操やボウリングといったスポーツにも、杉並区は大きく関わっている。スポーツの奥深さが実感できるコーナー。

写真:ボルダリング

産業・商業



区内に149社(2020年度調査)も存在するアニメーション関連企業、世界的シェアを誇る卓球用品メーカーのほか老舗企業・商店、都市型農業を紹介。街を歩くだけでは分からない地元で活躍する企業、職業に出合える。

写真:蘇る杉並の在来種

食



区民が勤めるレストラン、ベーカリー、スイーツショップなど、合計280店以上の情報をジャンル別で紹介。老舗の名物、隠れ家的カフェはもちろん、根強い人気のラーメン店も約70軒取材。ヘルシーメニュー店も掲載。

写真:有限会社宮野乳业

文化・雑学



杉並らしいおみやげ、著名人のお気に入り散歩コース、写真を撮りたくなるアートのスポットなどを多数掲載。杉並ゆかりの本も120冊以上を紹介。また寺社の秋の例大祭などローカルな情報は、役立ち度ナンバーワン。

写真:チェンバー・オブ・レイヴン

自然



荻窪で発見された絶滅危惧種「杉並メダカ」や、杉並で観察できる野鳥紹介など、都会で自然に親しめるコンテンツ。須田孫七さんの解説付のメダカを飼うための心得など、杉並で楽しめる地域密着の自然情報が満載。

写真:杉並メダカ

特集



ジャンル外の特集記事のほか、区民が実際に学校に向いて取材した「杉並の高等学校」「杉並の大学・短期大学」「杉並の専門学校」など進学を検討する中高生にも役立つ教育情報、防災、地域活動も紹介。

写真:阿佐ヶ谷美術専門学校

かつて杉並に存在した文化人コミュニティ

阿佐ヶ谷会

中央線沿線の文士の親睦を目的とした会。主なメンバーは、井伏鱒二、外村繁、青柳瑞穂、木山捷平、太宰治など。1938年頃に阿佐ヶ谷将棋会として発足し、中華料理店「ピノチオ」の離れを借りて将棋や飲食会に興じた。戦時中は会員の疎開などで中断したが、戦後に「純然たる飲み会」として復活。主に青柳邸を会場に、1972年まで年に数回開催された。



カルヴァドスの会

1949年から1983年まで、西荻窪の洋菓子とフランス料理の店「こけし屋」を舞台に、中央線沿線に住む文化人らが交遊を深めた集い。初代会長・石黒敬七(柔道家)、小松清(仏文学者)、田河水泡(漫画家)、林家木久扇(落語家)ら多彩な顔触れがそろった。酒を酌み交わし歓談しながら、時にはファッションショーやチャリティーオークションなどのイベントを楽しんだ。

●文化人コミュニティに関する書籍も参考ください。

『阿佐ヶ谷文士村』

著:村上護(春陽堂書店)

『「阿佐ヶ谷会」文学アルバム』

監修:青柳いつみこ 川本三郎(幻戯書房)

『無礼講の酒に集うカルヴァドスの会』

著:大石よし子(発行所:博秀工芸)

まち別検索



杉並区内の各駅ごとに歴史、人、食、スポーツなどジャンルを掛け合わせてクロス検索できる便利な機能と、まち別ダイジェストページが見られる。

Follow us on Instagram: suginami_namisuke. Includes QR code and social media icons.

すぎなみ学倶楽部ダイジェストブック「すぎなみ読書地図」令和5年3月発行

発行:杉並区産業振興センター観光係
問い合わせ:〒167-0043 杉並区上荻1-2-1 Daiwa荻窪タワー2階
電話03-5347-9184

編集・デザイン:特定非営利活動法人
チューニング・フォー・ザ・フューチャー

協力:区民ライター(村田理恵、矢野ふじね、井上直)、斜陽館
参考:川端康成学会公式ウェブサイト、国立国会図書館オンライン



杉並区公式情報サイト「すぎなみ学倶楽部」
www.suginamigaku.org

登録印刷物番号
04-0119